HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語広告表現の語用論的研究 ： 形式と機能に着目して［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	呂, 晶
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12078号
Issue Date	2016-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61606
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Lu_Jing_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　呂　　晶

審査委員　主査　教　授　加　藤　　重　広
　　副査　教　授　佐　藤　　知　己
　　副査　教　授　藤　田　　健

学位論文題名
日本語広告表現の語用論的研究　―形式と機能に着目して―

本論文は，日本語の広告表現を対象に，その形式と意味と解釈，伝達効果などを言語学的に分析したものである。特に，形式に関しては，文の完結性を山田文法における陳述論を踏まえて，多角的に区分して分類し，個別に分析を加えている。また，メッセージの解釈に関する文脈の役割を明確にするために，文脈の区分を整理し，発信者と受信者，話し手と聞き手のレベルを区別するなど，研究の基盤的な枠組みを整えた上で，多角的に考察を加えている。

分析に関わる基礎知見は，ネオグライス系や関連性理論や発話機能論など語用論の研究成果を幅広く利用しており，さらに日本語の記述文法の研究成果や，広告論などの成果もよく理解した上で整理して，十分に分析に活かしている。個別の広告表現も幅広く収集され，広告メッセージとしての分析もひろく解釈のゆらぎを想定しながら手際よくなされている。

従来の広告表現の研究は，マーケッティングや企業研究，流行現象などと関連させた表層的なものが多く，学術論文などでも，ごく少数の例を取り上げて，関連性理論などの特定の理論のみを適用した分析が大半を占めている。文を研究対象としていながら，文法的な差異に一切関心を払わない研究も多く，本論文のように，記号論・形態論・文法論・語用論の各段階を踏まえて，広範に例を収集し，丁寧な分析を手堅く積み重ねた研究は，この規模では他に例を見ないものである。

広告表現を言語学的に考察した論考，特に語用論的な分析を加えた論考は決して少なくはない。しかし，その多くは，特定の広告表現のみを取り上げ，個別に分析を行ったもので，いわば症例研究の域を出ていない。日本語の広告表現の言語学的研究において，発信者と受信者，話し手と聞き手，また，聞き手の多層性を踏まえて，広告表現の形式性に着目しながら，本論文のように網羅的に論じた研究は，その扱う範囲の広さ，整理された分析手順においても，匹敵するものは見当たらない。広告表現の伝達は，仮想される話し手と実際のメッセージの発信者が異なることが多いという点で，日常の会話よりも複雑な伝達であるが，その複雑で多層的な伝達性を分析する手順を整えた枠組みは，通常の会話はもとより，同様の多層性を持つ他のメディア（例えば，短詩形文学など）の解釈や伝達機能の分析にも適用可能だろう。本論文の特に評価すべき点は，メッセージの多層性について，理論的な類型化に終わるのではなく，類型化したあとにタイプごとの実例分析を行っている点である。

語用論的な分析を行う上で，いわば文脈の逆形成とも言うべき「文脈創成」の概念を提唱した点は，今後の語用論的研究の発展性を考えると，本論文の大きな貢献だと評価できる。通常の語用論的分析では，文脈に関わる要素は分析に必要なものを帰納的に取り入れるか，事前に，文脈種別を設定して発話の展開にあわせて収集するかのいずれかであるが，実際の発話やメッセージでは文脈情報が不足していることが多い。不足する文脈情報について，欠落しているものを発話から推論により逆形成して埋めていくとする文脈創成は，短い表現だけで文脈情報に欠落の多い広告の場合には、有効な分析手段になる。これは広告分析の新しい可能性を広げたと言える重要

な成果である。

また，収集された多くの広告文は，個々に形式・統語・意味・解釈のレベルごとに詳細に分析されており，すべてではないが，モーラ数などリズム的な要素や，表記法などにも分析が及んでいる。非母語話者たる著者が，母語話者でも，日本語の広告表現という解釈の一義化に難渋しうる分析対象を，このように深く掘り下げ，多角的に論じ，かつ，精密に解釈している点も評価に加えることが可能だろう。もちろん，語用論的分析としながらも文構造の形式性に重点があり，文脈論との関係からまだ掘り下げるべき余地があること，述定性と不完全性について，表意の観点から再度区分を検討する余地があること，非言語的な要素の影響の検討など，望むべき点が残っていないわけではないが，その規模と質，言語研究への貢献は十分に評価に値する。

本論文は，210 頁超の労作であるが，それに先立って，査読付きを含む論文 8 編と国際学会・全国学会を含む 9 件の口頭発表という実績があり，本論文に掘り下げるべき余地は残っているものの，理論面でも実際的分析の面でも広範かつ手堅く論考を重ねて独自の研究成果を挙げている点は特に評価すべきである。

審査委員会では，５回に渡る委員会で詳細な検討を行い，口述試験を課した上で，審査委員が全員一致ですぐれた学位論文と評価し，博士の学位授与が妥当であると判断したものである。

以上